

新疆と近代日本との関係史スケッチ

櫻井良樹

はじめに

最近の中国関係のニュースの中で、新疆における民族運動の問題を目にすることが多くなった。平成24(2012)年度に大学の同僚の先生方と「中国新疆地域をめぐる歴史社会研究」というテーマのもとに研究会を開始した時には、まだそれほどでもなかった。

これは新疆における民族問題が現実的に混迷の度を深めていることによることにもよろうが、いっぽうでは現在における日本社会の新疆や中国そのものへの関心の高まりの反映であるかもしれない。ここで言う関心の高まりというのは、必ずしも良い意味でのものではなく、たとえば日中関係の悪化状況下の中国国内問題に関するメディアの注目が高まったことが反映しているというようなことも含まれる。

新疆は、地理的にも歴史的にも日本からはひじょうに遠い存在である。ただ新疆をシルクロードという言葉に置き換えた時には、地理的には遠いが、歴史的にはやや身近になる。遠い昔、奈良時代の天平文化が、西域のもっと西方、ペルシアや天竺の国からシルクロードを通して運ばれてきたものの影響を受けていたことを思い出せば納得できよう。その場合のイメージは、タクラマカン砂漠をラクダに乗って通り過ぎた隊商の姿や、仏典を求めてカイバル峠に挑んでいく三蔵法師のイメージである。ただし、その際の新疆は通過点に過ぎず、新疆独特のイメージを感じているというわけではなからう。

本稿は、近代日本において新疆問題が、どのように日本人たちによって捉えられてきたかを政治外交史的な側面から大きくスケッチしてみようとする試みである。

すでに近代における日本人と新疆、西域、シルクロードとの関係については、探検家たちの物語を含みながら、多くの研究や記録がある。日本人の探検としては大谷探検隊の活動などは有名である。筆者も、その

ようなものを好んで読んだことがある⁽¹⁾。しかし本稿で扱いたいのは、そのような冒険物語がどのように描かれてきたかではなく、遠い新疆という土地が近代日本人の注目を浴びた理由の変遷である。

このような関心を持ちながら研究会メンバーと現地を訪れたり、自己流で新疆と日本に関する関係史を探っていた。もちろん先行研究にも、そう多くはないが触れてみた⁽²⁾。本稿は、先行研究と重なる部分も多いが、自分なりに関心が膨らんでいった過程をスケッチ的に記したものである。なお本稿は日露戦後から昭和初期に限定して論じていくことにする。

1. 辛亥革命後における参謀本部の中国政策と新疆

筆者が、研究会において行った新疆に関する初めての報告は、中国が混乱を始めるきっかけとなった辛亥革命直後の時点で、新疆を日本人がどのように位置づけていたのかを、日本陸軍の視点から見ることであった。具体的には、陸軍参謀本部第二部長の宇都宮太郎（部長在任期間は1908年12月～1914年5月）の日記⁽³⁾と文書を見ることにより、新疆およびその周辺の地域にどのような関心が払われているかを確認することであった。参謀本部第二部は、海外情報や海外仕事を担当する部署で、中国情勢の推移をウォッチし、中国各地に部員を派遣していたところであるから、その第二部長のもとに入ってくる情報や関係者との往来記録は、当時の陸軍の海外に関する関心の度合いを示す良い指標だと考えられる。

表 宇都宮太郎日記に登場する語の日数

	蒙古	滿蒙	滿州	滿鉄	土耳其	回教	印度
1907	0	0	8	0	2	0	0
1908	0	0	0	2	2	0	0
1909	7	0	5	6	3	1	3
1910	18	1	12	9	8	6	3
1911	13	1	13	4	9	0	1
1912	49	14	27	5	2	0	4
1913	7	19	24	24	4	3	1
1914	10	3	5	6	1	0	1

これまでの研究の中には、新疆に関する記録（諜報記録類）が残されていることをもって、そのまま日本に侵略の意図や新疆に対する特別の関心があったようにストレートに結びつける傾向があったように感じられる。

さてちょっと脇道に逸れたが、宇都宮日記に「新疆」の文字が出てくるかどうかということだが、その結果は、残念なことに登場してこなかった。ちなみに「陝西」と「甘肅」を表わす語句は1912年に2日出てくる。「新疆」のみならず、「青海」や「山西」の語も登場してこない。これに対して「蒙古」あるいは「内蒙古」の登場する日数は、きわめて多く、年毎に示すと、表に掲げたように、1909年7日、1910年18日、1911年13日、1912年49日、1913年7日、1914年10日という結果となる。1912年にかけて徐々に増加し、それ以後減少している。いっぽう「満蒙」という語は、1910年1日、1911年1日、1912年14日、1913年19日、1914年3日である。辛亥革命以前はほとんど使われていなかったのが、1913年にかけて急激に増加している。満洲を表わす「満」という語（「満蒙」「満鉄」を除く）は、表の通りで1912年が最も多い。トルコを表わす「土」はどうかであろうか。数はそんなに多くはないが、蒙古や満蒙より早くから登場し1910年から翌年にかけて多い。日土条約やトルコ派遣の参謀本部員絡みの件が多く、回教徒や回族を意味する「回」も1910年が多い。「回」については、「土」とも関連するが、後述する。ちなみにインドの「印」は、トルコより少し少ない程度である。

中国やアジアの各地域への関心を語句の出てくる度合いから見たもので、内容的なものはいっさい問わずに示したもののだが、比較対象となる語を設定して較べてみると、まったく無駄な作業ではない。宇都宮（ひいては参謀本部）が、蒙古についての関心を辛亥革命以前から持っていたこと、満洲と蒙古をひとまとまりにした満蒙という語句が熟語として定着してくるのは辛亥革命後からのことであること、中国西部地域への関心は、蒙古や満蒙に比較すると、それほど高くなかったということである。

それでも陝西・甘肅という西域への入口の地域への言及が二度あるこ

とは無視できない。具体的に示すと、1912年の以下の記述である。

5月21日 歩兵中佐日野強を陝甘升允の許に密派、歩少佐水町竹三を印度に、歩大尉武田額三をカムシャツカ方面に密派することに確定。

6月11日 此夜、陝甘派遣の歩兵中佐日野強、英国出張の歩少佐畑英太郎、印度出張の歩少佐水町〔空白〕、並に第四課長歩大佐武藤信義らを招き晚餐を饗す。

ちょうど辛亥革命が一段落した頃の記事で、上の方は、参謀本部から各地に部員を密派する、その一つの地方に陝西省と甘肅省方面が含まれ、日野という人物を派遣することになったという記事であり、下の方は、その送別会を行ったという記事である。

日野強（1865-1920）という人物は、新疆に入った日本人として名が知られており、その簡単な紹介は金子氏による『中央アジアに入った日本人』にある。1889年に陸軍士官学校を卒業し、日露戦争に従軍、中佐にまで進級した、日野を有名にしたのは、その中央アジア旅行記であった。日野は日露戦争が終わった一年後の1906（明治39）年10月13日に北京を発し、上原多市とともに陝西省の西安から、甘肅省の蘭州を経て、1907年1月に新疆に入り、トルファン、ウルムチ（廼化）、タルバガタイ（塔城）、イリ（綏定城）、クチャ、アクス、カシュガルを経て、9月にヤルカンドを発して崑崙山脈を南下、10月1日に標高5642メートルのカラコルム峠を通りヒマラヤ山脈を越えてインドに至る旅行を行った。新疆滞在は約7ヶ月半。ベシヤワール、カルカッタ、シンガポール、香港を経て東京に戻ったのは12月25日、つまり1年2ヶ月にわたる大旅行を行った人物である。帰国後の1909（明治42）年5月に『伊犁紀行』を博文館から刊行し、広く新疆事情を世間に伝えたという点で重要な人物であった⁽⁴⁾。辛亥革命後の活動としては、1913年6月の予備役編入直後に、第二革命に敗れて日本に亡命してきた李烈鈞を鎌倉の別荘「義烈荘」にかくまったことが知られている。本稿にとって重要なことは、日野は中

国の西部地域に詳しい人物で、その経験を買われて陝西・甘肅方面に派遣されたことである。

幸いなことに、この日野の陝西・甘肅地方への派遣に関する命令書が宇都宮太郎関係資料に残っている。「出発に臨み日野中佐に口授したる企望の要旨」⁽⁵⁾という1912年6月15日付けの文書である（史料の引用文は、カタカタはひらがなに直し、適宜句読点を補った。以下、引用同じ）。そこには、「該方面に所謂中華民国と相容れざる有力なる一勢力の存在せんことは、我国策の運用上寧ろ企望すへき所なりと信す」るので、「貴官は該方面に至り、此勢力を求めて之と接着し、要すれば之を助長することを努め、断へす之と密接の連絡を保持し、必要の際国家か之を利用し得る如き関係に在らしむることに努力すへし」と、まず記されている。袁世凱によって統一された中華民国とは異なる勢力が、陝西・甘肅方面に存在することが望ましいので、そのような勢力を探して近づき、その者を助けていつでも日本が利用できる関係を築けというのである。

そしてそれに加えて「断へす該勢力と満蒙、山東〔ママ〕、西藏、雲南等に於ける共和反対の諸勢力、就中露国との関係を研究して之を報告することを努むへし」として、この勢力と満蒙、山東、西藏、雲南における非共和派およびロシアとの関係について報告せよという指令がなされている。ここに出てくる山東は、地域の並び方から山西の書き間違いの可能性もある。もちろん山東でも意味は通じるのだが、もし山西だとすれば、中国辺境地域における動向に注意を払えということになる。

この中華民国とは異なる勢力として考えられていたのが、5月21日の日記に出てくる升允という人物であった。升允は、かつて清王朝のもとで陝甘総督をつとめたことのある人物であった⁽⁶⁾。共和制に反対する勢力と見なされたのである。だが升允は、この時すでに勢力を失っており、その約一年後、1913年5月31日の宇都宮日記には「升允の所へ入込まする目的を〔以て〕派遣せし歩中佐日野強、帰朝來衛す。目的を達せざりしなり」と結末が記されている。もともと「該勢力の真相、実力、其主なる中心人物等は尤も速かに知得せんことを企ふ」と派遣の際に指示されていたことからすると、参謀本部にも情報は乏しく、失敗に終わった

のである。

以上の日野についての宇都宮資料の記事一つからでも、辛亥革命前後、陸軍参謀本部は陝西くらいまでを視野に入れて工作を行っており、新疆はその先にあったことがわかっていこう。

さて日記には「回」が数ヶ所登場する、その最初は1909年5月8日の記事で、イブラヒムのことを説明した記事で回教徒だと記されている⁽⁷⁾。1910年の6日にわたる記事は、イブラヒムと同じ頃に日本に滞在していたファードリーというエジプト人軍人で、日土条約絡みで、回教徒と連携して欧米勢力に対抗するという動きとの関連である。1913年の3日分の記事は、二つは回教徒利用策を献策してきた人物に関するもの、一つは東南アジアの回教徒を表わすものである。すべて回教であり、回族を指すものはない。後述の新疆調査報告類では、ウイグル族などは纏頭と記されているが、これも出てこない。

では新疆を宇都宮はどう位置づけていたのであろうか。宇都宮資料中の方には、気づいた限りのものであるが、新疆の文字が含まれているものが数点ある。たとえば「極秘 対支那時局策」⁽⁸⁾というタイトルの1912年と推定される史料は、もしも中国が分割されるような事態に至った場合の日本の対応について論じたものである。その場合に、日本が後援して満蒙を独立させる必要性が説かれているが、その他の中国辺境の地も現在の趨勢では独立するであろうとして、ロシアの関心が伸びている地域として「内外蒙古、北満洲、新疆、青海」等が挙げられている。さらにこれに関連すると思われる「大正二年四月七日稿」という文書⁽⁹⁾の「列国の支那に有する勢力」という項目では、「露国は北満洲に於ける不拔の経営を外にし、昨年来蒙古、新疆地方に着々鋭鋒を進め、庫倫喇嘛を懐柔せる新勢力は、最早何人の批判をも許さす」という記述があり、さらに「列国の対支那政策」という項目で、「露国の蒙古新疆に於ける経営」がイギリスの西藏における影響力の拡大に伴随するものと、並んで記されている。

このようなところから宇都宮は、日本が南満洲を自国の勢力圏下と見なしているのと同様に、新疆をロシアの勢力圏下におかれる地域として

認識していたこと、中国の混乱の中で、ロシアの影響力が新疆に拡大していくことを憂慮し対抗しようというような動きはしていないこと、隣の内モンゴについては喇嘛たちとの提携も策していたにもかかわらずそのようなことを書いていないところからは、この時期に新疆にまでは工作の手を伸ばしていなかったことが窺われるのである。新疆における民族問題への注目もない。

王柯氏らにより「満蒙及新疆ニ対スル露国ノ経営」という参謀本部作成の書類（1912年6月12日）¹⁰⁰が注目されており、新疆への言及もあるが、その責任的位置にいた宇都宮の行動と関心を考えると、この文書は、やはり新疆よりも満蒙への関心を中心にして捉えるべきであらう。それに加えて辛亥革命にあたって宇都宮が、中国本土が数国に分立して相争うことを理想とし（本土が列強によって勢力分割されることには反対し）、それらと日本が個別に関係を築きあげることによって日本の影響力を伸ばすことを主に策しており、中国の辺境地域については独立する趨勢にあると見なし、さらに日本の影響下に南満洲・東部内モンゴの分離を促進させることを考えていたとすれば、同じようにロシアの影響下における外モンゴや新疆の独立、イギリスの影響下における西藏の分離は、あり得るもので、それについては邪魔しない考えだったと推察される。なおこの頃の宇都宮の対中国政策については拙著『辛亥革命と日本政治の変動』を参照されたい¹⁰¹。

2. 日露戦後の日本の新疆調査

このような宇都宮の新疆への突き放したような態度は、日露戦後の日本の新疆に対するロシア影響力の増大に対する懸念とは対照的でさえある。

日露戦争後の時期には、数多くの日本人が新疆入りをした。たとえば外務省は蒙古から新疆にかけて5人の調査員を派遣している。これに加えて、すでに紹介した陸軍軍人の日野強の調査や、日露戦前の1902（明治35）年から始まり、1908年の第2次調査、1910年からの第3次調査と続いていく大谷探検隊の調査もある。

外務省による調査は、イギリス政府との商議を経て行われたもので、1905年5月9日付内田駐清公使宛小村外相電報「庫倫外四箇処へ視察員派遣に関する件」¹²⁾によると、次のような理由で計画が立てられている。

目下の時局に際し、清国边疆に於ける露国の動静を監視し、併せて地方の情態を詳にするは頗る緊要の義に有之候に付、上海東亜同文書院卒業生中より別記五名を簡選し、右視察の爲め、外蒙古中、庫倫、烏里雅蘇台及科布多、並に甘肅、伊犁の五ヶ処に派遣することゝなり、本人等は約二週間内に当地出發

日露戦争中に立てられた計画で、清国がロシアと国境を接している辺境におけるロシアの動静を調べることを目的として、次の5名が選ばれ派遣されたのである。

視察員氏名及分担視察地

一 草 政 吉	烏里雅蘇台地方
一 櫻 井 好 孝	科布多地方
一 三 浦 稔	庫倫地方
一 波多野 養 作	甘肅地方
一 林 出 賢次郎	伊犁地方

この5人の中で新疆に入ったのは3人であり、それぞれ次のような復命書を提出している。櫻井好孝「蒙古視察復命書」(1907年2月)、波多野養作「新疆視察復命書」(1907年8月)、林出賢次郎「清国新疆省伊犁地方視察復命書」(1907年10月)¹³⁾。なおこの派遣が東亜同文書院で最終学年に行われることになった調査旅行のきっかけとなったこと、および波多野養作の旅行の詳細については藤田佳久氏が明らかにしている¹⁴⁾。

実際に彼らが北京を出發したのは日露戦争が終わる2ヶ月前の7月であった。報告書から旅程を復元すると、三人は別の道を取りながら甘肅省を経て、1906年1月にはウルムチで集合し、櫻井は外蒙古へ、波多野

と林出はイリへ向かった。櫻井はそこから東へモンゴル草原に入り、張家口を通過して北京に帰り着いたのが11月、波多野は帰り道に青海省に寄ってダライラマに面会して、甘肅省からは北東に進んで蒙古に入り、張家口を通過して北京に帰り着いたのが1907年6月、林出はイリに長く留まり、ほぼ行きと同じ道を戻り、北京に戻ったのが1907年5月のことだった。林出は、ウルムチからの帰途、反対方向からやってきた日野強と行き会っている。新疆への滞在期間は、櫻井が約3ヶ月半、波多野が約11ヶ月、林出が1年3ヶ月である。

各人の復命書については、すでに先行研究が言及しているので、詳しくは述べずに、いくつか気になった記事のみをあげておく。三人に共通して見られるのは、漢人と現地各民族の対立、宗教レベルにおけるトルコとのつながりなどが観察されていることである。三人が出発した時には、まだ戦争中であったが、視察そのものは日露戦後の状況が記されている。櫻井はロシア敗北の結果、極東への南下政策は阻止され、ロシアが「満洲に於て一大失敗を招ける結果、新疆、蒙古方面に倍加の勢を以て鋭意南下の慾を逞しくせんとするの形跡あり」(p.37)として、ロシア商人の進出策を進めていることや国境貿易の盛行を指摘する。林出も日露戦争敗北を機としてロシアの新疆政策は冒険的なものから着実なものになったとして、「新疆にして一度彼の占むる所とならば、蒙古は従て彼の掌中に帰すべし、此時に当り甘肅、山西、直隸は如何にしてか守るを得ん、新疆を失ふは是れ決して中央支那を守るの所以にあらざるなり」(p.70)と、新疆におけるロシアの影響力の増大が、単に新疆のみにとどまる問題ではなく、中国の中央部にも影響を及ぼす問題であるという危機感を表わしている。

いっぽう波多野は、平素からロシア人に圧迫されているトルキスタン人が、ロシアへの反発からトルコよりも日本に頼ろうとする動きのあることを、「日本は清国の与国にして土耳其の好善国なりと、清国如何に露国に劣るとも既に之等の強国を与国とす、露国何ぞ清国に対して誇る事を得んやとの奇説」(p.50)があると伝えている。林出も「日露戦争の起りしより露国の連戦連敗は露国民の意気を銷沈せしめ、之に反して清国

民は大に元気付き来れり」(p.12)と指摘する。そこで林出は、日本の取るべき方針を次のようにまとめ提言する (p.73)。

此際日本人か清国人の後見者となり補助者となり、彼等各種の新事業の経営に従事し、各種の機械類を日本より買求めしめ、之か使用法教授者となり、或は是か使用者となり、各般の事業に従事せば、従て新疆と日本との連絡堅固となり、且日本人か彼の地に在りて常に露国の行動に注意し、彼れ露国の活動に応じて或は日本政府より支那政府に対し、或は直接新疆の清国官吏に注意を与へ之に相応するの施設をなさしめ、軍備に教育に実業に日本人の周到なる注意を以て清国を補助し、此地人民をして日本人の信頼すへきを知らしめ、着々其方針を誤らざるを得は、他日事あるの日に当り空しく露国の侵略に遭ふ事なかるへし

つまり日中が提携してロシアに当たること、具体的には清国政府の新疆経営に日本が援助を与えることによってロシアの侵略を防ぐことが必要だと述べているのである。これは日清戦後からの、日本が清国の近代化を援助して日本の影響力を大きくしていこうという側面での日中提携路線に立つものであった。なお林出は、実際に、1907年再び新疆に入り、ウルムチの法政学堂教員となり、それを実践しようとした。もっとも新疆と深く関わった人物である。

以上のような三人の観察は、そのまま日野の『伊犁紀行』にもあてはまる。ロシアへの警戒感については、日露戦争の敗北によってロシアは「其の鋒鋦を収め、一時慎重の態度を装ふと雖も陰に其の爪牙を磨き、孜孜として勢力扶植の道を講じ今や漸次再び其の萌芽を発せんとするもの少からざるを覚ゆ」(下巻 p.309)と述べ、新疆は日本から遠く離れており、「我国の利害と直接相関するもの無きに似たりと雖も、等しく清国の領土に属し、其喪失は、老大帝国瓦解の前提たらざるを保すべからず」(下巻, pp.313-314)と、新疆がロシアに奪われることが中国分裂の引き金となる可能性に触れている。そのいっぽうでは、清国の官吏たちが

「若し日露戦争微りせば、新疆は既に清国の有には非ざりしならん」（上巻 p.203）と公々然として明言したことにも言及している。これは日本が清国の新疆統治の味方をするを是とする見方である。

これらの日露戦後における日本人たちの新疆調査に見られる問題意識は、新疆はまさにロシアの影響力が伸びていく可能性の強い地域であり、それへの警鐘を鳴らしたもので、まだロシアとの対抗意識が前面に出ており、それを押しとどめるためには中国を引きつけておくことが日本にとっては重要であるとするものであった。新疆地域における複雑な民族問題については、詳しくは述べられてはいるけれども、どのような関わり方をすべきかは述べられておらず、対外的政策としては（もちろんそれに関与することは内政干渉にあたるから公然とは述べられないであろう）提示されていない段階にあることがわかっていく。

さてちょっと付記しておきたい。新疆に関する日本陸軍が得た情報についてである。その多くは清国駐屯軍（→支那駐屯軍）経由であるが、これは天津に駐屯していた軍司令部の諜報活動の一端であった。駐屯軍の本来の任務は、在清公使館・領事館保護および外国人保護のほか、北京と海浜間の自由交通確保であった。これは義和団事件での清国情勢の混乱に対応したものであり、その後の清国情勢の鎮静化にともなって別の役割が重視されていくようになった。これが中国に関する諜報業務であり、具体的には、中国の政治情勢や軍事情況を探り、さらには社会状況や産業などを調査し本国に報告することであった。

この側面における活動が、特によくわかるのが、1905年から1908年にかけてである。この時期の定期報告が、ほぼ完全な形で防衛省戦史研究センター図書室に残されている。定期報告の「駐屯軍旬報」・「駐屯軍報告」・「新聞翻訳」の三種類である。この内の「駐屯軍報告」・「新聞翻訳」が、中国情勢を伝えている。「駐屯軍報告」は、仙波太郎司令官時代から送られていた「特報」を、1905年から改題したもので、中国情勢について司令部がまとめて報告したもの、「新聞翻訳」はその典拠資料的な意味を持ち、天津で収集した諸種の新聞・雑誌の記事を翻訳したもので、範囲は軍事・外交・交通・政治・革命党・土匪などの状況など総合的な清

国情勢報告になっている。その中にも新疆情勢に関するものがかなり含まれている。しかしこれらの史料は、多くのなかの新疆情報であって、特に新疆に関心を示したものではないということに注意が必要であろう。

3. 大正期から昭和期にかけて

ここまで日本人が新疆をどう見たかという視点から論じてきたが、実際の新疆における政治情勢は、どのようなものであったのだろうか。1911年の辛亥革命勃発に呼応して、新疆でも革命派が新軍を組織し立ち上がったのは12月28日のことだった。これはすぐに失敗したが、翌年1月7日イリの惠遠城で起きたクーデターにより新政府が組織され、清朝側との戦闘が開始され、一進一退の状況となった。南北和議成立後の3月27日、清軍を率いていた新疆巡撫の袁大化は共和制に賛意を表わし、イリ軍と談判の結果、4月25日袁は辞し、楊増新が新疆都督となった¹⁵⁾。

その後、第二革命・第三革命、内戦激化と続く中で、職名は転々と変わったが、楊はその位置をよく保ち、1928年に新疆省主席となるまで新疆における軍事・外交の実権を掌握して、独裁的な政治を行った。袁世凱の帝制を支持したが、内戦に対しては中立的な立場を取り、中央政府から財政的な自立を図り独自の紙幣を発行し、域内の民族対立を利用しながら、いっぽうでは中央政府から大幅な自治権を獲得するなど、新疆を中央政府からは相対的に独立した地域として実質的に支配した。ロシア（→ソ連）に対しても、外交関係を結ぶなどのことも行った。1928年、蒋介石によって北伐が達成されると、楊は国民政府を認め政権に従う態度を示したが、その直後の7月に暗殺された。新たに省主席となったのが金樹仁である¹⁶⁾。

色々と事件はあったものの、辛亥革命後から昭和初期までの新疆を一言で言えば、楊増新によって中国中央政府ともロシアとも摩擦を回避しながら、独自の政治が行われた時代であったと言える。ただしその独自性は、中国の分裂状況の表われでもあった。

そのような情勢の推移のなかで、日本はどのように新疆とかかわり、あるいは新疆への思いを抱いたのだろうか。それを知るために、てっと

り早い方法は、アジア歴史資料センターにアクセスして「新疆」で検索してみることである（たぶん多くの人がそうしているだろう）。その結果は、それほど得られるものは多くない。その中で系統的に使えるものは、外務省記録の「各国内政関係雑纂／支那ノ部／西藏新疆」⁽¹⁷⁾の簿冊であり、これは時期的には明治末から1926（大正15）年をカバーする。その後を引き継ぐ昭和期の簿冊が「新疆政況並事情関係雑纂」全10冊⁽¹⁸⁾であり、これは時期的には1926年から1944年までのものである。この2つの史料群は、外務省に入ってきた諸情報をファイルしたもので、日本政府のかかわりを直接的に記したものではない。また前者における情報は、辛亥革命期を除いては量が少なく、さらに西藏関係のものが多い。そのような情報の存在状況は、後者の新疆単独の史料群（第一冊）になっても1928年までは、変化していない。このこと自体が、大正期における日本と新疆との現実的なつながりの薄さを表現している。

断片的に伝えられる情報の中には、次のようなものがあった。辛亥革命によって引き起こされた新疆の状況は、1912年中の数通の情報で、ロシアの動きを警戒するような意図をもって送られている。落ち着きを取戻した1913（大正2）年以後、たとえば2月の北京公使伊集院彦吉からの報告は、回族の不穏な動きを抑えるために政府は優待条件8条を決定したというものである。それは、回族を満漢蒙蔵と同列におくこと、鉦山は回族で開発することを認めたこと、中央政府は回族を保護するため兵を送ること、回族に選挙・被選挙権を与えること、回族の外債は中央政府が引き継ぐこと、風俗・習慣は改めないことを約束したことなどであった。1914年7月に参謀総長より送られてきた情報は、2月に伊犁鎮辺使は新疆都督の監督下に置かれ伊犁將軍の権限は消滅したこと、伊犁で発行の紙幣について新疆省発行紙幣に替えること、政府側官吏とロシア領事との反目があること、ロシアは混乱を予想しそれに乗じようとしていたが混乱しなかったので不発に終わったというようなことである。

その後は、ロシア革命関係の記事が見える。これと関連しそうなものが、他の史料にもある。たとえば1918（大正7）年3月5日付の支那駐屯軍司令官石光真臣より陸軍大臣大島健一宛の「諜報機関配置ノ件報

告」⁸⁹⁾である。これは駐屯軍の諜報担任地域内における諜報機関の配置を報告する文書で、張家口、陝西・西安、新疆・迪化、外蒙古・庫倫における諜報員氏名が記されている。新疆・迪化は、佐田繁治という在郷軍人下士官の担当となっている。王氏が指摘するように、この時期に日華陸軍共同防敵軍事協定が締結され、シベリア方面からロシア革命の波及が懸念されていたから、それへの対応の一環であったろう。

ずっと時代は飛んで1926年5月のノボォ・シビルスク島田滋領事よりの報告は、1922年から1924年にかけてのソビエトと新疆との外交関係の推移に関する報告である。1922年より通商交渉を開始したが難航し、1923年8月からの交渉では請求権問題を棚上げして進み、1924年10月にウルムチにソビエト領事館、新疆に接するソビエト連邦内に中国領事館が開設されたことなどが報告されている。この1924年は中ソ協定が結ばれた年であるとともに、満洲における張作霖とソ連との間に奉ソ協定が結ばれている。それを考えると、これは新疆独自の動きではなく、ソ連の対中政策の一環であっただろう。

いずれにしても情報は断片的で、政策提言があるわけではなく、まとまりを欠いている。しかしそれらの情報がまったく無意味であるというわけではない。パブチャップの蜂起に参加しようとしたり、セミヨーノフ軍に一時参加した大陸浪人である副島次郎の1924年の中央アジア横断旅行（北京からトルコまで）の記事（『大阪毎日新聞』に掲載、イリまでで中断）や、その他の新疆について触れた新聞や雑誌記事などは、ある程度のまとまりをもって収められている⁹⁰⁾。

ところが「新疆政況並事情関係雑纂」第1冊の途中から、新疆情勢が騒がしくなってくるとともに、報告もかなり長くなり、時々調査報告的なものも含まれるようになる。それは1928（昭和3）年7月13日の駐華公使芳沢謙吉よりの、新疆省政府が6月に国民政府に服従を決定し、三民主義を遵奉することを表明し、省政府改組、青天白日旗を掲揚したという情報と、その約一週間後の7月21日に、再び芳沢より、国民政府に服従を決定した楊增新（新疆省主席）の暗殺報告からである。新疆省内が揺れ出したのである。新たに新疆のトップに立った金樹仁と、暗殺さ

れた楊增新系との争いがしだいに激しくなっていく。金は社会主義の影響を受けていると言われていた馮玉祥系であり、親ソ連的な政策を取った。そのため、しだいに新疆におけるソ連の影響力が増大して行ったことや、回教徒への圧迫を行ったことへの反発が原因であったようだ。

そしてこのような動きの末に起こったのが1931年のハミ蜂起と、それに引き続いて起こった1933年に始まる回教徒の反乱と動乱であった。この1933年から、「新疆政況並事情関係雜纂」の文書量は、とつぜん増加する。内容も高木陸郎の「新疆省独立事變の全貌」など興味深い史料がかなり多くなる。事件はカシュガルにおける新政府樹立がウルムチまでに拡大して、一時期は無政府状態に陥り、その中で金樹仁は免職され、盛世才が権力を握るのだが、ソ連の西北から新疆に介入する動きや、イギリスの南西からの動きなどが絡まり複雑な様相を呈していく。

興味深いのは、ちょうどこの時に中国大陸の東部では日本が満洲事変を引き起こし満洲国が建国されていた。この動きと新疆におけるソ連あるいは、新疆と西藏におけるイギリスの影響力拡大の動きとが連動していると報じられていることである。動乱はソ連と結んだ盛世才の下で鎮圧され、ソ連軍が新疆に入り、ソ連による借款供与も行われるなど、新疆に対するソ連の著しい影響と、中国共産党の影響力を強めることになった（もっとも後に盛は、国民党に寝返る）²¹。1931年のハミ蜂起以後の東トルキスタン情況は、王柯氏の前掲書が丹念に追っている。

満洲と新疆の間の作用は、たとえば現象としては、北満洲から撤退したソ連軍が、新疆に投入されることになったことによって現実にあったし、新疆に対するソ連の影響力の増大が外蒙古から東に進み満蒙地域に波及されるという懸念も生じた。それとは反対に、満洲における日本と、新疆におけるソ連の動きが同じレベルで捉えられる（これに西藏におけるイギリスの動きが重なる）。つまりそれらがアイコの行動として論じられたりもしているのである。かつて辛亥革命後に、もし中国分割が生じた場合の棲み分けとして想定された局面の再現である。もっとも蒙古問題におけるソ連との対立などもあり、そう簡単には割り切れるものではないが興味深い。

さてこのような新疆省での混乱は、新疆への日本人や外務省・軍の関心を高め、再び多くの新疆調査報告書を生むことになった。それがたとえば『新疆省事情』（1934年、外務省『国際事情』という雑誌の一部）、『新疆事情』（1934年、南京政府師長謝彬の著作の翻訳）、『新疆調書』（1935年、公使館高橋書記生の報告）、陸軍新聞班『外蒙及新疆の近況』（1935年）などであろう²³。

それとともにソ連の影響力が強くなった新疆状況を打破すべく、日本の民間では、イスラム教との提携を策すさまざまな動き（大川周明やクルバンガリー）や、中央アジアを故郷とするウラル・アルタイ語族の一致団結を説くツラン主義などの、荒唐無稽と感じられる運動も展開されるようになったのではあるまいか。

おわりに

新疆は日本にとって中国を越えた遠い位置にある地域だったため、実際の関わりよりも、周辺諸国（特に中国とロシア・ソ連）との関連において捉えられる地域だった。日露戦前から日露戦後にかけては、ロシアの南下に対する危機感から、どのように影響が及んでいるかを知ることが第一の関心であった。日露戦争直後も、まだ新疆に勢力を拡大しつつあるロシアという観察の上で、そのロシアとの対抗上、清国と協力して新疆におけるロシアの影響力を排除していくことが提案された。

辛亥革命が勃発して、中国自体の前途が危ぶまれた時の日本の関心は、中国に、特に満蒙にいかん影響力を確保していくかであり、その場合、ロシアの新疆に対する影響力の増大は、日本が満蒙に対する望みと同じ位相にあるため、日露戦後ほどには脅威をもって見られなかった。革命後、新疆は中国の中央政府から相対的に独自性を強めるとともに、ソ連とも特殊な関係を築く特別な位置を保っており、それに対して日本が関与する余地はなく、そのため関心もシベリア出兵前後を除いては薄かった。

しかし楊增新の没後、金樹仁の下でソ連の影響力が増加するとともに、新疆内での政治的・民族的対立が増して騒々しくなってくると、再び日

本人の新疆への関心は高まってくる。1933年の新疆動乱以後については、まだ勉強不足であるため、結論的なことは言えないが、「満洲国建国」が新疆地域に影を落としていること、さらに盛世才の下での親ソ政策の進展のなかで、はじめて新疆の宗教・民族的対立をふまえての民間における提携運動が出始めていることだけは指摘しておきたい。

注

- (1) たとえば金子民雄『中央アジアに入った日本人』（新人物往来社、1973年）。
- (2) 王柯『東トルキスタン共和国研究』（東京大学出版会、1995年）、同「近代における日本と新疆（東トルキスタン）」（山内昌之編著『中央アジアと湾岸諸国』朝日新聞社、1995年）、野田仁「日本から中央アジアへのまなざし」（『イスラーム地域研究ジャーナル』6号、2014年）。この内、野田氏の論文は、ロシア側の史料を用いながら、日本人の中央アジアとの関わりを扱ったもので、これまでの日中関係史から見られることの多かった日本人の西域への関心を、よりロシアとの関係に重点をおいて跡づけたものである。
- (3) 宇都宮太郎関係資料研究会編『日本陸軍とアジア政策 陸軍大将宇都宮太郎日記』第1巻・第2巻（岩波書店、2007年）。
- (4) 日野強『伊犁紀行』（博文館、1909年）。
- (5) 「宇都宮太郎関係資料」292-13文書、296-2文書（日本女子大学にて整理中）。
- (6) 山田辰雄編『近代中国人名辞典』705頁（霞山会、1995年）、「升允」の執筆者は久保田文次。
- (7) イブラヒムについては小松久男『イブラヒム、日本への旅』（刀水書房、2008年）が詳しい。
- (8) 「宇都宮太郎関係資料」330-4文書。
- (9) 「宇都宮太郎関係資料」357文書。
- (10) 「満蒙及新疆ニ対スル露国ノ経営」（アジア歴史資料センター、Ref. B03030414500、以下単に11桁の資料番号のみ示す）。
- (11) 拙著『辛亥革命と日本政治の変動』（岩波書店、2009年）。
- (12) 「蒙古辺境視察員派遣一件」（B03050330600）。
- (13) 櫻井好孝「蒙古視察復命書」（B03050332000～B03050332100）、波多野養作

- 「新疆視察復命書」(B03050331500, B02130295900～02130296700), 林出賢次郎「清国新疆省伊犁地方視察復命書」(B03050331600～B03050331700)。
- (14) 藤田佳久『東亜同文書院中国大調査旅行の研究』(大明堂, 2000年)。
 - (15) 辛亥革命武昌起義紀念館編著『辛亥革命史地図集』(新華書店, 1991年)。
 - (16) 「楊增新」『近代中国人名辞典』1030頁に多くよる。執筆者は久保田文次。
 - (17) 「各国内政関係雑纂／支那ノ部／西藏新疆」(B03050218800)。
 - (18) 「新疆政況並事情関係雑纂」全10冊(B02031843400～B02031854000)。
 - (19) 「諜報機関配置ノ件報告」(C03022435700)。
 - (20) 副島については満鉄弘報課編『副島次郎の中央亜細亜横断』(満洲日日新聞社, 1940年)。
 - (21) 「盛世才」『近代中国人名辞典』701頁。執筆者は伊原吉之助。
 - (22) 『新疆省事情』(B02130674500), 『新疆事情』(B10070379100), 『新疆調査』(B10070381100), 陸軍新聞班『外蒙及新疆の近況』(C14060826900)。

〔付記〕

本稿は主に平成24～26年度麗澤大学特別研究助成プロジェクト「中国新疆地域をめぐる歴史社会研究」(研究代表者堤和彦, 共同研究者松田徹・櫻井良樹)による研究成果の一部であるとともに, 平成26年度科学研究費・基盤研究(C)「清国駐屯軍・支那駐屯軍の研究」(課題番号24520768)の研究成果の一部でもある。